

歴史的分野を取り入れた租税制度の授業開発 —シナリオ教材を活用して—

中村 綾李

千葉大学大学院教育学研究科修士課程

近年、日本の社会はグローバル化や少子高齢化などの変化により様々な問題を抱えている。その社会の変化は、社会構造や経済問題にも影響を与えている。これから社会人として日本を担っていく生徒たちには、社会について知り、理解するだけでなく、どのように生きていくべきかの判断力や思考力が求められる。このことから、金融経済教育の充実が必要である。本論文では、中学校社会科において租税制度の授業を行い、作成した教材の有効性や課題について明らかにすることを目的とする。今後は租税教育について、わかりやすいだけの授業ではなく、租税教育は社会から何を求められているのかを把握した上でその時代や社会問題と関連させて租税制度について生徒に考えさせられるような授業が必要であると言える。また、本研究で用いたシナリオ教材だけでなく様々な教育方法を用いてさらなる授業開発の研究が必要である。

キーワード：社会科教育、租税教育、中学校、公民教育、金融経済教育

1. 問題の所在

1.1. 金融経済教育の必要性

近年、日本の社会はグローバル化や少子高齢化などの変化により様々な問題を抱えている。その社会の変化は、社会構造や経済問題にも影響を与えている。田村 (2017) は、「社会人 (消費者) としてよりよい生活を送るためには好況・不況、インフレーション・デフレーションに影響を受けることを想定し、貨幣価値に関して適切に判断する力が必要となる。」¹と述べている。また、金融経済教育を推進する研究会 (2015) は「子供たちには、社会を生きる力として、金融についての見方や考え方はもとより、その意義・役割を理解したうえで、今後の在るべき社会や自分自身の将来を見据え、金融に関する的確な意思決定や主体的な行動を支える金融リテラシーが求められています。」²と述べている。これらのことから、これから社会人として日本を担っていく生徒たちには、社会について知り、理解するだけでなく、どのように生きていくべきなのかの判断力や思考力が求められており、金融経済教育の充実が求められている。金融庁は、「金融リテラシー (金融に関する知識・判断力) の向上を通じて、国民一人一人が、経済的に自立し、より良い暮らしを送っていくことを可能とするとともに、健全で質の高い金融商品の提供の促進や家計金融資産の有効活用を通じ、公正で持続可能な社会の実現に貢献していくこと」³を意

義・目的としており、金融経済教育を推進する研究会は、中学校・高等学校といった早い段階での金融経済教育の積極的な取り組みが必要であると述べている。

金融経済教育の意義に含まれている金融リテラシーとは、「社会保障や税といったお金に関する制度を学び、実社会と関連付ける際の基礎となる能力」⁴である。社会保障や、租税に関する学習は中学校社会科公民的分野で学習する。金融リテラシーを学ぶにあたって、中学校社会科公民的分野で学ぶ社会保障や租税制度についての学習は金融リテラシーの基礎を形成するために大きな役割を持つだろう。

1.2. 中学校社会科における租税教育の課題

では、中学校社会科ではどのような学習を行なっていくべきなのだろうか。

多久島 (1995) は公民的分野の学習の課題として、「教科書に記述された内容を網羅的に扱う授業や、用語や理論・概念の解説的な授業となる傾向がある。このような授業には、学習者が教師から多くの事項を一方向的に教えこまれる立場におかれるという問題点がある。」⁵と述べ、これまで教師から一方向的に教え込む知識詰め込み型の授業が批判されてきたのは言うまでもない。現在では、知識詰め込み型の授業から「主体的な学び」、「対話的学び」、「深い学び」の授業が目指されるようになり、多くの授業実践の研究が行われている。

岩手県立総合教育センターが作成した「主体的・対話的で深い学びの実現を目指す授業改善 中学校社会科高等学校地理歴史科 公民科編」⁶では、教師が生徒に知識

Ayari NAKAMURA: Development of a Teaching Program on Tax System incorporating Historical Fields -Utilizing Scenario Materials- Graduate School of Education, Chiba University

を教えこむ、すなわち生徒が受け身になるような学習はない。「何ができるようになるか」、「どのように学ぶか」という当事者として知識はもちろん諸問題について考える力や学ばせる学習が示されている。そして、社会の生活で学んだことを生かせるようにすることを目標にした授業が行われている。

このような授業により、知識を身につけるだけでなく学習した内容や知識が社会でどう使われているのか、社会に出た時にどのように生かすのかについて生徒が考える機会を作ることができる。授業で社会と租税制度の知識を結びつけて考えることによって、生徒が社会人になった際に社会問題や課題に対して学んだ知識を生かして解決する力を育成することができるだろう。

しかしながら、租税制度に関する授業において「どのように学ぶか」について、「何が身についたか」までの授業実践は行われているが、「何ができるようになるか」までを取り入れた授業はあまり開発されていない。

租税制度に関する授業は、用語が難しいことから「どのように学ぶか」の授業開発の研究がなされてきた。国税庁では、租税教育の充実を図るため小学校から高等学校における租税教育の授業として租税教育指導事例集を作成している。租税制度は財政や私たちの暮らしに密接に関わっている。租税制度の主な役割は財政の確保である。私たちが豊かな生活を送ることができているのは、公共サービスのおかげである。そのため、租税制度に関する学習は、財政を確保するために租税制度のことを学習者に正しく理解させ、納税者の自覚を育成することを目的としている。

今後は、少子高齢化が進むにつれ納税者一人当たりの負担額が大きくなることが予想されている。また、少子高齢化問題だけでなく、グローバル化による雇用問題など今以上に財政や租税制度に関する問題は複雑化するだろう。そのような社会の中で、租税制度を正しく理解するだけでなく、その知識から納税者として、社会人としてどのように財政の問題と向き合っていかなければならないのかを現在の租税制度の学習を通して考えていく必要がある。現在行われている授業では、租税教育の学習として十分であると言えないのではないだろうか。

1.3. 歴史的分野の連携の必要性

租税制度がなぜ必要なのか、租税制度がどのように社会問題を解決してきたのかを考えるためには、歴史的分野との連携が必要であると考えられる。これまで地理的分野、歴史的分野、公民的分野を連携させた授業実践や研究がなされている。学習指導要領でも、小中の連携やそれぞれの分野で学習したことを基に公民的分野の学習に繋がっていることがわかる。

また、佐藤・真島（2017）は「小・中学校での国民の経済活動に関する学習、特に「租税の本質」を考察することができる歴史的分野の学習が果たすべき役割は大きい」と述べている。以上のことから、歴史的分野と公民的分野の連携した授業は必要であると言える。

しかし松尾（2012）は「中学校社会科は分野別の構成となっていたため、社会科全体における位置づけや小中学校社会科のつながりへの意識といった点で課題があった。」⁸と述べている。また金子（2018）は、「高校の公民科教師は、目の前の高校生は小中高校をとおして「税・財政」を歴史的分野と公民的分野という別々の授業の枠組みで学習していることを認識して教材を作成すべきだ」⁹と述べている。社会科の学習は中学校から、地理的分野、歴史的分野、公民的分野に教科書も分かれている。そのため、租税制度に関する学習について歴史的分野と公民的分野の連携が取れておらず、生徒も歴史的分野と公民的分野で学ぶ租税制度を同じ制度として考える機会がないことは課題である。「租税教育の体型図」¹⁰を見てみると租税制度は公民的分野として取り扱われており、歴史的分野との関連性がないことがわかる。

以上のことから、小中高の連携や分野間の連携が求められているがまだ十分な実践と検討がされているとは言えない。

租税制度は奈良時代から現代まで、それぞれの時代に合った制度づくりがされている。先にも述べたように生徒が社会人になり、納税者となる頃には今と違う社会問題が起きているだろう。生徒に租税制度がどのようにあるべきなのか、どのような制度が適切なのかを考えるためにも租税制度の必要性や在り方を、歴史的背景に基づいて租税制度の変容や改正を学んだ上で考えさせる授業が必要であると考えられる。

2. 研究の目的と方法

本論文では、中学校社会科において制度学習として租税制度の授業を行い、作成した教材の有効性や課題について明らかにすることを目的とする。

研究は以下のように行う。実践は、千葉大学教育学部附属中学校の2年生を対象とする選択教科において2019年度前期の開講された「社会迷宮から脱出せよ。」の全9時間のカリキュラムの内3時間で行う。授業の概要は以下の通りである。

実践校：千葉大学教育学部附属中学校
教科：社会科（選択社会）
対象学年：中学2年生
対象人数：男子4名、女子12名 合計16名

時間：50×3時間 (14:10～15:00、7月3日のみ 11:35～12:25) 実施日時：1時間目 6月19日(水) 2時間目 6月26日(水) 3時間目 7月3日(水)
--

3. 授業の開発

3.1. 授業で取り扱う内容について

今回の授業では、租税制度の必要性和、租税制度と社会問題との関連性について歴史的分野を取り入れた問題解決型学習の授業を行う。

3.2. 教材のストーリー活用について

本実践を行った選択教科は全9時間のカリキュラムを複数の教師がオムニバス形式の授業で行うというものであった。授業者は小牧(2020)が開発したシナリオ型教材を使用した。この教材のねらいとして小牧は「本教材で学習した後、生徒がある地域の問題を解決しなければならない場面に遭遇した際に、生徒自身の力で地域の人々と協力しながら問題を解決できるようにすることがねらいである。」¹¹と述べている。納税された税金は私たちの生活を豊かにするために活用されている。地域によって様々な課題を、どのように税金を使って解決していくのか地方自治体や地域の人々と協力して解決していかなければならない。この教材を活用することで、どのようにすれば課題を解決することができるのかを考える学習を行うことができるだろう。

本授業のストーリーは表の通りである。

表1 本授業のストーリー

場面	展開
1	コマリさんが租税教室の依頼を受ける (租税制度の歴史について)
2	コマリさんが奈良時代へタイムスリップ 課題①
3	コマリさんが安土桃山時代へタイムスリップ 課題②
4	コマリさんが明治時代へタイムスリップ 課題③
5	コマリさんが昭和時代へタイムスリップ 課題④
6	全体のまとめ

租税制度自体は生徒にとってあまり身近なものではなく、消費税など税の種類や用語は聞いたことがあるだろ

うが、租税制度そのものについて考える機会がない。そのため、租税制度について学習する際、当事者意識を持つことができず他人事として租税制度に関する授業を受け、納税者意識を身につけることができない可能性がある。しかし、このシナリオ教材を用いることによって、学習者つまり生徒は租税制度について主体的に考えることができることを見込まれる。

3.3. 歴史的分野の活用について

本実践では、租税制度がなぜ必要なのかということを中心に扱った。租税制度がなぜ必要となったのか、その後、租税制度はどのように変化していき現在の租税制度の内容になったのか、各時代の社会問題や財政問題に関連させた内容とした。登場人物「コマリさん」が4つの時代にタイムスリップをし、その時代で租税制度について課題を持ち困っている人ともに租税制度を改正していく事によってその課題を解決するという内容である。生徒には、その時代の社会の動きや様子を踏まえて課題について考えさせ、どのように租税制度を改正していく事で課題を解決できるのか考えさせた。租税制度について、中学校2年生ではあまり知識がないため、本実践では租税制度の難しい用語を必要としない工夫を行なった。また、活動のために必要な歴史的内容や情報についてはもう一人の登場人物である「シラベさん」で補助することとした。

3.4. 活動のねらい

本授業の活動は、なぜ租税制度を取り入れなければならなかったのか、政治の状況と合わせて考えることで租税制度の必要性や特徴について考え理解させることを目的とした。租税制度の始まりを学習することで、租税制度の必要性や特徴について理解させることができると考えた。また、3時間目では租税制度が社会の諸問題の解決とどのように関連しているのかを考えさせることで、租税制度、財政、政府の政策という3つのつながりについて生徒に理解させることを目的とした。

公民科的分野における租税制度の学習は財政の確保として学ぶことが多い。なぜ財政を確保しないといけないのかという根本的な政府の政策についてはあまり学習されていない。しかし、政府の政策について納税者が興味関心を持つことも必要であると考え。財政の確保と政府の政策を関連させて、租税制度はどうあるべきなのか、今度どのように租税制度は変化していくべきなのか、様々な事柄に関連して考える力を身につけさせることを全体的なねらいとした。

3.5. 授業内の活動

本授業では、「コマリさん」が架空の世界において「租税制度の歴史について」という題材の租税教室を行うというミッションのために、4つの時代にタイムスリップしてそれぞれの時代における租税制度について知ることがストーリーの大きな軸となっている。租税制度を歴史的事象と関連させて考えることにより、租税制度がなぜ必要となったのか、租税制度がどのように変わってその時代の社会情勢と合う制度となっていたのかを生徒が考え、理解できるような活動を目指した。

3.6. 授業の展開と全体

この授業の展開の特徴としてまず、各授業の最初に租税に関するクイズを取り入れたことが挙げられる。租税制度について学習するのは中学校3年生からである。そのため、中学校2年生では詳しい用語や租税制度の内容を知らないことも多い。そこで、租税制度や租税の種類について生徒に興味を持ってもらうためにクイズ形式で租税制度や種類について考えてもらうことにした。蔵満(2017)は「学習クイズは、授業に明るい雰囲気をもたらすだけでなく、児童生徒の知識や思考力をより豊かなものにすることが期待できる。」¹²と述べている。本授業では、学習クイズを授業の導入で使うことにより、知識を豊かにするだけでなく租税制度という複雑な制度や生徒が聞き慣れない用語に対して、楽しく学ぶ雰囲気づくりとして学習クイズの効果は期待できると考えた。

次に、各時代の租税制度を理解させるために課題を出し、その課題は難易度の違う問を2つ出すこととした。1つ目は、教科書や資料集を用いるとわかるような内容とし、2つ目の課題は社会問題を関連させて、1つ目の課題で教科書や資料集で調べたことを活用して考えさせることを目的とした。この2つの課題を合わせることで、資料を活用して、租税制度がどのように社会問題と関わりを持って諸問題を解決する手立てとなっていたのかを生徒に考えさせることができる。

以上の授業展開により、租税制度について難しい制度として考えるのではなく、クイズを通して租税制度が生活や健康などに関係していることを楽しく学ぶことができると考えた。その雰囲気から、教科書や資料集を活用して考えることや教科書などを活用するだけでは解決できない、少し難易度が高い問題でも学習意欲を保ったまま活動に取り組む流れを作ることができるだろう。

4. 授業の実際と考察

4.1. 授業実践の実際

本節では、各授業の実際について記述する。授業は筆者が行った。各時間の主な生徒の活動について以下の表2から表4に示す。

表2 授業の計画 (1時間目)

時間	学習内容
10分	事前アンケートを行う
5分	税金クイズから税金の事について知る
15分	租庸調について学習する
15分	奈良時代ではなぜ租庸調制度が必要だったのか学習する
5分	本時のまとめと次回の学習について予告する

表3 授業の計画 (2時間目)

時間	学習内容
10分	前回の復習と税金クイズ
5分	税金クイズから税金の事について知る
10分	豊臣秀吉が行なった政策について調べ、どのような社会の様子だったのか考える
20分	太閤検地の特徴と役割について考え、グループごとに発表する
5分	本時のまとめと次回の学習について予告する

表4 授業の計画 (3時間目)

時間	学習内容
5分	前回までの復習
10分	今までの租税制度の課題について考え、地租改正について調べ、グループごとに地租改正の特徴と役割について発表する
10分	戦前の租税制度の課題を踏まえて、戦後どのような改正が必要だったのか考えグループごとに発表する
5分	総まとめ
10分	事後アンケート

4.1.1. 1時間目の考察

1時間目の授業では、制度の学習という難解かつ抽象的な内容を取り扱う。だからできるだけ学習意欲を高めて、授業に取り組みやすいような雰囲気作りのために、生徒が面白いと思えるような学習クイズを用意した。また、面白いだけではなく、私たちの生活に関わりがあるということを生徒に理解してもらいやすいように食べ物や動物などに関する税のクイズを選んで出題した。そのため、生徒たちは楽しみながらクイズに取り組み答えていた。クイズには日本の租税制度に関するものだけでなく、海外の内容も取り入れることで、生徒たちからは日本の租税制度に対する発言も出てきた。また、クイズに

解説を付けることで、それぞれの租税の種類の特徴を捉えさせ、様々な問題がどのようにして租税制度で解決されたのか、もしくはされようとしているのかを考える練習の場となった。最初から、課題に入るのではなくクイズのような生徒にとって考えやすい形式で出題することにより、難しい課題でも考えればできるかもしれないという意識作りができたと思われる。

次に、本授業はシナリオ教材を使って授業を展開した。「コマリさん」は市役所の税制課に異動し、租税教室の準備をしなければならず困っているという設定とした。本授業の前にこの形式での授業が行われていたため、生徒はストーリーの中に自然と入り込めていた様子であり、ストーリー自体を楽しんでいるようであった。

1時間目の中盤では、租税制度の始まりについて取り扱った。「租庸調」に関しては歴史的分野で既習の内容であるため、基本的な内容については割愛した。本時では、なぜ租税制度が日本にも必要となったのかを中心に生徒に考えさせるようにした。歴史的分野の教科書では、中央集権国家を目指すためと記載されていることが多く、生徒の回答でもそのような内容の回答が多かった。そのため、授業者は「中央集権国家にするとどのような問題が起きるのか」、「その問題を解決するためになぜ租税制度が必要だったのか」を生徒に考えさせた。生徒がこの課題について考えるにあたり「シラベさん」が適宜、奈良時代の情勢や制度について情報を出すこととした。

本時はグループで活動させ、グループでどのように考えたかを発表させた。4つのグループとも活動の中で、支配する範囲が広がるとどのような問題が起きるのか、律令制による政府の負担などと、「租庸調」の特徴を合わせて奈良時代における租税制度の必要性や特徴について考えた発言や話し合う様子がみられた。

このように、中央集権国家にするために租税制度が必要であったということだけでなく、図1のように中央集権国家にするとどのような課題が出てくるのか、またその課題をどのように租税制度を利用して解決していくのかを考えさせることで社会問題や情勢と租税制度が関連しているということを生徒が理解する必要がある。ワークシートによる振り返りでは多くの生徒が、奈良時代において租税制度がなぜ必要なのかがわかったと記述していた。

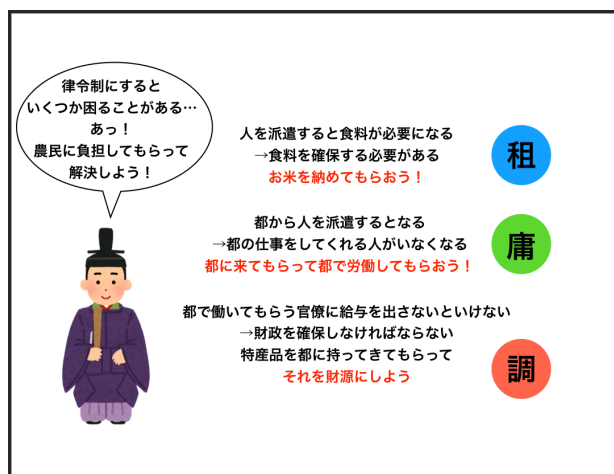


図1 実際に授業で使用した資料

4.1.2. 2時間目の考察

本時の導入で使った租税制度に関するクイズのテーマは、日本の税金がどのように使われているのかというテーマとした。生徒は納税された税金が学校や図書館などに使われているということは知っているため、実際どれほどの金額が使われているのか具体的な数字を選択肢として与え、考えさせた。

今回はゴミの排出量とそれにかかる処理の費用にどれくらいの税金が使われているかについて考えさせた。具体的な数字を出して考えさせることで、生活の中では当たり前だと思っていることも、納税されている税金のおかげで豊かな生活を送っているということや、生徒の予想以上にゴミ処理にはお金が必要であるということに気づく発言があった。

本時では、安土桃山時代の内容を取り扱った。この時代では豊臣秀吉が行った太閤検地を扱った。歴史の授業では、太閤検地の内容について学習するが太閤検地がなぜこの時代に合った租税制度であったかまでは学習しないことが多い。なぜ、安定した税の徴収ができなかったのかを考えることで、この時代の社会情勢を理解することを目標とした。また、それを踏まえて租税制度を整えるためにはどのような政策が求められているのか、税を納める側の農民と租税制度の関わりについて理解することが必要であると考えた。そのため、安定した税を確保できる要素として図2のように2点にまとめた。ワークシートの記述からは、安定した税を確保するためにその時代によって制度の内容を変えていく必要があることが理解できたという記述があった。現在でも、脱税行為は行われてしまっているため、納税者が脱税をしないように様々な対策が取られている。この時代からも脱税、つまり納税から逃れたいと思う農民にどのような制度の仕組みにすれば納税させることができるのかを考えさせる

ことで、租税制度が社会だけでなく私達の生活によって変化していることを理解させることができた。

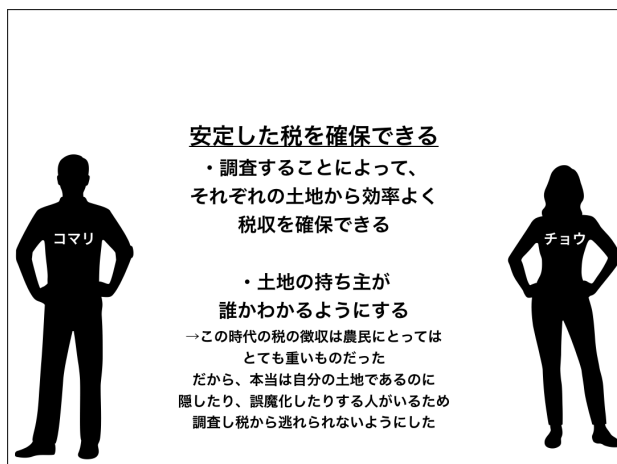


図2 実際に授業で使用した資料

4.1.3. 3 時間目の考察

本時の導入では、クイズではなく 1、2 時間目の復習を行った。

本時では、歴史の中で租税制度が社会問題をどのように解決していったのか生徒に考えさせる活動が主な内容であった。そのため、今までどのように考えて解決してきたのかを導入で復習する必要があると考えた。図3のように考えてきたものを視覚化することにより、本時でもどのように考えていけば解決にたどり着けるのかを生徒に理解させることが大切である。

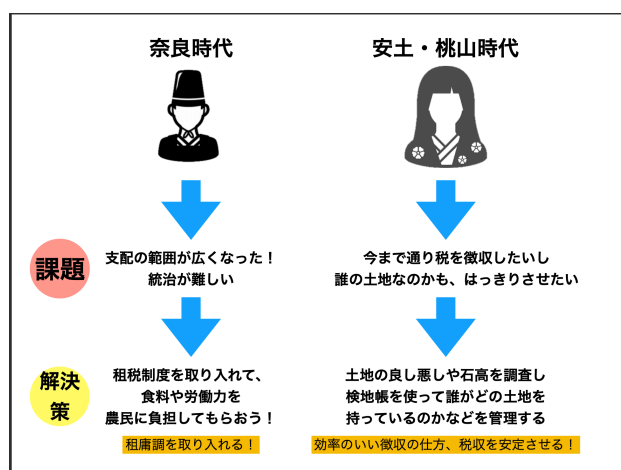


図3 実際に授業で使用した資料

本時では、明治時代と昭和時代を取り扱った。明治時代は日本の租税制度の歴史の中で大きくその制度が変わった時代と言える。明治時代では、地租改正というものを制度とし現金で納めるようになった。本時の初めでは、なぜ現金で納めるようになったのかを考えさせるために今までの年貢米制度のデメリットについて考えさせた。

その上でどうしたら財政を安定させることができるかを考えさせた。そうすることで、生徒はより地租改正について理解することができていた。社会科の教科書では、現金にすることで財政を安定させることができると記載されている。しかし、生徒の発表から年貢米のデメリットを生徒に考えさせ理解させることで、現金にすることでどれだけ安定した財政を確保することができるのかを考えさせることができたことがわかった。

次に昭和時代太平洋戦争終戦後について取り扱った。明治時代以降、租税制度に様々な種類の税金が導入された。現代でも納められている、所得税や間接税の数々は終戦時とは内容が違うものであった。戦争時の軍事費や財政の確保の仕方などは、明治時代や現代とは大きく違う点がある。租税制度も戦争時に合うような制度と変わっていった。そのため、終戦時の租税制度を取り扱うことによって、それぞれの社会の変化と租税制度のあり方や内容の変化についてわかりやすく生徒に理解させることができるのではないかと考えた。現代の租税制度にどうつながっているのかを生徒に理解させることは、今後の租税制度を考える上で重要である。

本時の最後では、歴史を辿っていくことの必要性と社会や租税制度について関心を持ちどのような特徴があるのか見抜き課題解決で何が求められているのかを生徒の発言や発表、ワークシートによる記述から理解させることができたと言える。

4.2. 授業実践の考察

本授業では、租税制度の歴史を生徒に学習させることで租税制度と社会との関連性について考えさせた。生徒に与えた課題の内容や難易度に関しては、改良や研究の余地はある。しかし、ねらいであった、租税制度がどのように社会問題を解決する手立てになっているのか、その時代の社会問題や社会情勢によって租税制度がどのように変わっていったのかを理解させることができたと考えられる。本授業では、昭和時代までしか取り扱うことができなかったが、本授業の内容を踏まえて現代の租税制度にも生かして考えさせることができれば、今後生徒が納税者になった時に、納税者としてどのように社会問題と租税制度を関連させて考えていくべきなのかを考える手立てになるであろう。

租税制度の学習について、歴史的分野を取り入れることやシナリオ教材を用いることにより、ストーリーや世界観を利用して抽象的で考えにくい内容も生徒が考えやすい環境を作れることが示唆された。また、租税制度の内容について単体で学習するのではなく、歴史的分野や政治の内容など様々な内容と関連させて学習することが必要である。以下、アンケートの内容からも本授業に関する考察を行う。

4.3. アンケートの考察

授業の初回と3時間目終了後にアンケートを行なった。事前アンケートと事後アンケートから考察をしていく。

事前アンケート(表5)では、小学校での租税教育についてと現段階での租税に対する知識について尋ねた。多くの生徒が小学校の頃に税金について習っており、使い道を知っていると答えた生徒が半数いた。小学校の頃に「税金がなかったら」というビデオ教材を見たことがあると答えた生徒もあり、小学校での租税教育が充実していたことがわかった。

しかし、納税する事に納得しているかという質問では納得していると答えた生徒の理由が「国や社会で必要だから」、「生活が困る」と記述した生徒が多く税金が何のために必要なのか、なぜ税金がないと生活に困るのかを具体的に記述した生徒はいなかった。中学校社会科公民分野における租税に関する学習内容として、具体的に租税についての学習から生徒がなぜ租税制度が必要なのか、今の租税制度は国や社会のために活用されるために十分なものなのかを生徒が考え、理解できるようなものが必要であることがわかった。

表5 事前アンケート

アンケート項目	Yes	No
小学校の頃に税金について習ったことを覚えていますか	10名	6名
税金の使われ方を知っていますか	15名	1名
税金は必要だと思いますか。	16名	0名
消費税などを負担することに納得していますか	14名	2名
租税教室を受けたことがありますか	3名	13名

事後アンケート(表6)では、本教材についてわかりやすかったと全員が回答した。その理由として、「時代ごとに考えていく事でつながりがあってわかりやすかった」、「ストーリーの中に登場人物が出てきて、楽しく学ぶことができた」、「時代を追っていくので、租税制度の変化や細かい部分がわかりやすかった」などストーリーや歴史を用いる事で租税制度について理解することができたことがわかった。また、今回の授業を通して租税制度に興味を持つことができたかという項目では半数以上が興味を持ったと回答した。どのような事について興味を持つことができたかという項目に関しては、「今の制度にどのような課題があるのか」、「今回やったところ以外の税制度やその動きについて知りたい」、「現代の問題点やそれを解決するために必要なこと」などの記述があり、現代の租税制度に対して興味を持たせることができていた。

この結果から、現代の租税制度の必要性やあり方を考え、理解するためには租税制度の歴史を学ぶことは有効であると言える。しかし、授業内で用いた課題解決活動については、教科書に載っている事については簡単だったが、教科書に載っていない事について考えるのは難しかったと答える生徒が多数いた。教科書に載っている用語についての学習は生徒も嫌なイメージを持たずに取り組むことができたが、教科書や資料集を使ってその時代の社会の流れや政治の仕組みなどの時代背景を読み取って租税制度について考える活動は難しかったと答える生徒が多かった。教科書から、該当のところを探し出してまとめることはできるが、資料を活用して言葉でまとめるというのがあまりできていないことがわかった。租税制度を理解する上で国や社会の課題から考える必要がある。そのため、資料を活用し生徒が資料から読み取ったことから租税制度について考えられるような架け橋が大切であることがわかった。

表6 事後アンケート

アンケート項目	Yes	No
今回の授業は租税制度についてわかりやすかったですか	15名	0名
現代の租税制度についても興味が出ましたか	13名	2名
普段の社会科で学ぶ知識はテスト以外でも生かす場がありますか	8名	7名
ストーリーを用いることによってどのような内容なのか理解しやすかったですか	14名	1名

4.4. 教材の有効性と課題

本教材には、2点の特徴がある。

まず一つ目は歴史的分野の内容を取り入れたということである。租税制度の学習は公民的分野の内容であり、歴史的分野ではあまり詳しく学習を行わない。しかし、今回は歴史的分野を取り入れることによって租税制度の始まりや各時代でどのように租税制度が変化していったのかを学習することができた。それにより、租税制度がなぜ必要となったのか、租税制度が社会問題と結びついてどのように適応していったのかを生徒が考えることができた。以上のことから、租税制度が学習する上で歴史的分野の内容を入れることで租税制度の学習を深めることができたと言えよう。

次にシナリオ教材を用いた教材ということである。租税制度は抽象的な内容であり、かつ用語も生徒にとっては聞き慣れないものも多い。また、租税制度自体を身近に感じるものがあまりなくいくつかの単語を知っている程度にとどまっている。しかし、それは生徒だけでなく

大人もあまり身近に感じていないことも多く、租税制度に関してあまり関心を持っていない。だが実際、租税制度は社会に大きな役割を持つ制度であり、私たちの生活に密接に関係している。本授業のようにシナリオ教材を用いることで、生活の中でいくつかの課題を主人公と照らし合わせて解決していくことにより課題に対する当事者意識を持ちながら取り組むことができた。

しかし、ストーリーの内容はまだ改善の余地があると思われる。今回はストーリーの面白さよりも課題解決の活動の内容が主となってしまった。今後は生徒がストーリーの中に入り込むだけでなく、ストーリー自体にも興味を持って取り組めるような教材づくりが必要であると感じた。

5. 今後の課題

本論文では、中学校社会科において制度学習として租税制度の授業を行い、作成した教材の有効性や課題について明らかにすることを目的とした。租税制度の学習において、歴史的な分野を取り入れることで生徒が公民的学習の内容の学習を深めることができることがわかった。

今後は租税教育について、わかりやすいだけの授業ではなく租税教育は社会から何を求められているのかを把握した上でその時代や社会問題と関連させて租税制度について考えられるような授業が必要であると言える。また、本研究で用いたシナリオ教材だけでなく様々な教育方法を用いてさらなる授業開発の研究が必要である。

さらに、租税教育の内容に関してもどのような教育内容が求められていくのか、生徒にどのような問題を与えると良いのかなど授業内容に関しても課題が残った。わかりやすい内容はもちろんのこと、どのような問題解決型学習の授業が生徒にとってよい授業になるのか今後明らかにしていきたい。

- 岩手県立総合教育センター (2017)『資質・能力の「三つの柱」を総合的に育む授業づくりガイドブック』
http://www1.iwate-ed.jp/kankou/kkenkyu/172cd/h28_020_2_2.pdf (2020年1月29日最終確認)
- 金子幹夫 (2018)「経済教育における「税・財政」の学習に関する一考察 -歴史的な分野と公民的分野における「税・財政」の学習内容の背景-」、『経済教育』、37巻、経済教育学会、pp.63-68
- 金融経済教育を推進する研究会 (2015)、「中学校・高等学校における金融経済教育のさらなる拡充に向けた要望書」、http://www.jsda.or.jp/about/teigen/kyouiku/content/youbo_usho.pdf (2020年1月29日最終確認)
- 金融庁(2013)「金融経済教育研究会報告書」、https://www.fsa.go.jp/singi/singi_kinyu/soukai/siryou/20130605/07.pdf (2020年3月26日最終確認)
- 蔵満逸司 (2017)「遊びと学びをつなぐ学習クイズの作り方」、『高度教職実践専攻(教職大学院)紀要 Vol.1』、琉球大学大学院教育学研究科、pp.175-185
- 小牧瞳 (2020)「複数の教科に適応可能なシナリオ型教材の枠組みの開発-「コマリさん」と「シラベさん」を用いた教材の提案-」、藤川大祐編 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書 第357集 『人工知能社会における教育に関する実践研究(2)』、pp.73-83
- 佐藤央隆・真島聖子 (2017)「中学校社会科歴史学習で求められる租税教育：市民革命と税意識」、『探究(28)』、愛知教育大学社会科教育学会、pp.17-24
- 租税教育推進関係省庁等協議会 (2015)「租税教育の事例集(中学生版)」、<https://www.nta.go.jp/taxes/kids/kyozai/jireishu/pdf/jireishu.pdf> (2020年3月26日最終確認)
- 多久島文樹 (1995)「中学校社会科公民的分野における教材構成の方法 -教材構成の類型化と「分離独立型」教材の構成方法-」、『社会系教科教育学研究 第7号』、pp.49-54
- 田村徳至 (2017)「教職課程履修学生に対する金融に関する学習プログラム開発 -貨幣錯覚に関するアンケート分析を手がかりとして-」、『経済教育 36巻 36号』、経済教育学会、pp.72-77
- 松尾知明 (2017)「現代社会の課題とこれからの公民教育の考え方・進め方・見方・考え方の育成に着目して-」、『法政大学教職課程年報 15』、法政大学キャリアデザイン学部、pp.28-27

謝辞

本研究の授業実践に際し、千葉大学教育学部附属中の生徒、教員の方には多くのご協力をいただきました。ここに感謝の意を表します。

-
- 1 田村 (2017)、p.72
 2 金融経済教育を推進する研究会(2015)、p.1
 3 金融庁、p.3
 4 金融経済教育を推進する研究会(2015)、pp.3-4
 5 多久島 (1995)、p.49
 6 岩手県立教育センター、p.1
 7 佐藤・真島 (2017)、p.19
 8 松尾(2017)、p.29
 9 金子(2018)、p.63
 10 租税教育推進関係省庁等協議会 (2015)、p.26
 11 小牧 (2020)、p.75
 12 蔵満 (2017)、p.175

引用文献